

県中教育

編集・発行 福島県教育庁県中教育事務所
発行責任者 青田 誠
編集協力 県中市町村教委連各支会
県中各地区小中学校校長協議会

随想



県中教育事務所長 青田 誠

私たちの身の回りには携帯や液晶テレビなど、多くのデジタル家電が溢れています。つくづく便利な世の中になったものと思えます。

改めて言うまでもなく、デジタル家電には、マイコンや液晶パネル、リチウムイオン電池など様々な機器が組み込まれています。その開発と実用化に寄与したのが日本人であると言われるています。残念なことに、世界に先駆け製品開発に成功したにもかかわらず、各国への普及の段階で他国産の製品と競合し、国産品のシェアが劣ってしまいうケースが少なからず存在しています。要因は別にしても、信頼性の高い製品を開発しながら普及の段階で後塵を拝することは残念なことです。しかし、製品開発の分野ではもつと深刻な問題があります。

オリジナルテイに富む製品の開発・製造に関わった技術者などが、技術のノウハウとともに海外へ流出しているというのです。さらには、戦後復興の日本を支えた人材の高齢化の問題です。このことは様々な分野で顕著になっていきます。特に、憂慮すべき例として、日本の伝統的な産業や文化を支えた職人の減少と後継者不足の問題があります。卓抜した技能や技術の伝承には、口伝と共に実際の作業プロセスからでしか身に付けることができないこともあります。当然ながら相当の経験年数を必要とします。

から今日まで、日本の教育を支えたベテランが数年以内に相当数退職することです。本県も例外ではありません。対応策として優れた若い人材を確保し育成することは、本県の復興を支える点からも大切なことです。と同時に、ベテランの優れた指導技術等を、次世代の教職員にどのように伝えていくのかも重要であると考えます。豊かな経験と実践に裏付けされた暗黙知と呼ばれるような貴重な財産を、いかに伝承していくのか。研修は勿論のこと、日々の教育活動の中で、教職員相互のコミュニケーションの在り方など、今こそ振り返ってみる必要があると思っています。



牡丹守

須賀川市教育委員会 教育長

柳沼 直三



年月を経た赤松が林立する雨上がりの須賀川牡丹園。枝葉を伝わる雨滴が根元の苔を潤し、園内は、まさに「閑寂」という形容がぴったりの佇まいを見せている。松籟から漂うマイナスイオンが五感に心地好く、何か別世界にいるような錯覚さえ覚える。

今年も牡丹園は、心配された異常低温の影響を物ともせず、五月の中旬には大輪の花が咲き競い、多くの来園者に至福のひと時を与えてくれた。紫がかつた濃紅色の在来牡丹、薄桃色の玉芙蓉、凜然と光をまとう白玉獅子、少し首を傾げた淡黄色のハイヌーン等々、二百九十種七千株の牡丹それぞれが百花の王たらんと自らを誇示している。

「牡丹は立派な花を咲かせてくれました。」と安堵の表情を見せながら私に話しかけてくれた。二百四十有余年もの歴史を刻む牡丹園。彼は、「一本たりとも枯らすことなくしつかりと後世に伝えたいの思いから、毎日が緊張の連続です。」と言葉を継いだ。毎日の気象に一喜一憂し、紋羽病が出ていないか、テッポウムシにやられていないか、ぼかし肥えの効きはどうか、木酢液散布はこの時期で本当に良かったのか、剪定の切り返しはこれでいいのか等、枚挙に遑ない心配事に夜も眠れない日も珍しくないという。「手間暇を惜しまず、気を抜くこともなく、牡丹のためにと試行錯誤を繰り返す。来年はさらに立派な大輪の花をとの思いが己の怠惰を戒める。常に牡丹を日々の行動の真ん中に据えているからこそ、牡丹はしつかりと応えてくれる。」牡丹守は話をこう結んだ。毎年、当たり前のように花を愛でさせてくれる牡丹園。牡丹守の言葉に、教育行政を預る者としての在り様を教えられた思いがした。

健康で明るい生活を送るための基本的知識を身につける

生涯にわたり実践できる態度を養う健康教育

歯と口の

健康づくりを通して

石川町立中谷第一小学校

平成二十三・二十四年度の二年間にわたり日本歯科医師会の指定を得、福島県教育庁、石川町教育委員会のご支援の下、「歯と口の健康づくり推進事業」に取り組んで参りました。昨年度の九月二十一日には、授業公開を実施し、たくさんの方の示唆をいただきました。本校では、研究内容を三つにしばって研究を進めました。一つ目は、教科や学級活動での指導、二つ目は、保健指導、三つ目は、家庭・PTAとの連携です。

一つ目の教科や学級活動における指導では、各学年の発達段階にあつた適切な指導が必要であると考えました。そこで、各学級担任

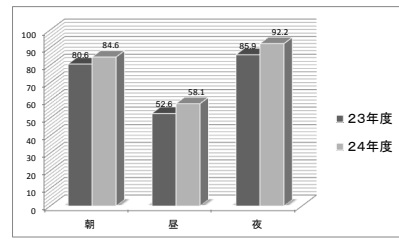


と養護教諭がチームを組んだ授業研究、上学年と下学年に分かれ、チームで指導する全体授業

専門性を生かした保健師、歯科衛生士との連携による授業を行い、研究を深めました。いずれも学級担任がT1を行うという形で取り組みました。

二つ目の保健指導では、日常における継続的な指導と習慣化が大切であると考え、清潔検査による指導、給食後の歯磨き指導など、養護教諭や担任が中心となって指導を行い、保健委員の児童を中心に「歯や口の健康」についての発表や「いろはカルタ」などを活用した健康推進の活動を行いました。また、学校保健委員会では、学校歯科医と薬剤師を招き本校の現状と対応について話し合い、日常指導に役立てました。

家庭地域の健康づくりを推進してきました。この二年間の取組で歯みがきが充実し、永久歯の治療率・朝食の摂取率が共に高くなりました。



長期休業中の歯磨き実施状況

これは、授業の充実に努めたことにより児童の健康への知識と実践意欲が高まったこと、地域や保護者と共に実践してきたことにより「歯や口への健康づくり」に関心が高まったことの現れと考えられます。一方、学校の指導や保護者の指示が届かない場合でも主体的に行動できるように、さらなる実践と取組を重ねていきたいと考えています。



新採用教員研修スタート

四月十六日、岩瀬・石川・田村地区から二十八名の新採用教員が集まり、郡山合同庁舎の第一会議室にて、小・中学校初任者研修、新規採用養護教諭研修が行われました。

研修では「新規採用者・初任者研修の進め方」についての講義があり、選ばれた教員として自覚と責任をもち、目の前子どもたちの夢の実現に向けて、今後一年間研修を重ねていくよう励ましの言葉がありました。初任者一人一人が、これからも頑張っていこうと引き締まった表情を見せていました。その後、「域内の学校教育指導の重点」についての講義があり、毎日の授業や各種活動においては、何に主眼を置いて進めていくのかを学びました。また、講義・演習「学年・学級経営の在り方」では、「グループエンカウンター」を実際に体験しながら、子ども同士や子どもと教師の信頼関係づくりについて学びました。そこでは、研修が進むにつれ、たくさんの方の笑顔が見られ、初任者同士でも会話が弾むようになりました。初

任者にとつて、かわりが深まっていく過程を実際に経験できたい機会となりました。



<かわり合って>

最後の所長講話「新規採用者・初任者に期待すること」では、子どもと共に歩む学校をつくるためには、教師が夢をもつて一歩前進すること、また、子ども、保護者、地域の方々、同僚とのかかわりの大切さが話され、一人一人がその言葉をしっかりと心にとめることができました。研修後には、様々なことを学んだり、初任者同士で新たな人間関係づくりができたことについての感想も聞かれ、充実した研修となったことがうかがえました。



<夢をもって前進！>

初任者紹介

新採用三ヶ月を過ぎて

夢だった幼稚園教諭になって

須賀川市立稲田幼稚園



教諭 中村 文香

小さい頃から遊ぶことが大好きだった私は、いつしか遊びの楽しさを子どもたちに教えていきたいと思うようになり、今年その夢が叶い、稲田幼稚園に着任し、幼稚園教諭の道を歩み始めました。

新採用三ヶ月を過ぎて

石川町立石川小学校



教諭 五十嵐淳子

ずっと憧れていた教職に就き、あつという間に三ヶ月が過ぎました。子どもたちと過ごすことは何よりも楽しく、次々に新鮮な発見のある充実した日々を送っています。

充実した三ヶ月間

田村市立船引中学校



教諭 伊澤 彬

着任してから三ヶ月が過ぎ、少しずつですが教員生活にも慣れることができました。着任した当初は、右も左も分からないことばかりで、職員室を右往左往している毎日でした。しかし、今では一学年の学級担任、サッカー部の顧問など充実した日々を送っています。周りの先輩方を見習いながらの学級経営、日々の授業、顧問としての仕事など、初めての経験ばかりですが、素晴らしい先生方に囲まれ、恵まれた環境で仕事ができる自分には本当に幸せだと思います。

三ヶ月が経過して

福島県立岩瀬農業高等学校



教諭 大戸 剛

新採用教員として岩瀬農業高校に着任してから三ヶ月が経過しました。着任当初、学校の生活リズムや自分が「教諭」と呼ばれることに慣れず、戸惑うこともありました。現在は周りの先生方や生徒たちとコミュニケーションをとりながら、楽しく充実した日々を送っています。

新採用教員として赴任して

小野町立夏井第一小学校



養護教諭 木村 綾香

私は、小学校の時の養護教諭にあこがれ、この職を目指しました。四月から新任養護教諭として勤務し、三ヶ月が経った今、やりがいがあり魅力的な仕事だと感じています。また、いつでも優しい声掛けをしてくださる先生方、保護者、地域の方々から、毎日楽しく勤務しています。

初めのうちは、新入園の園児たちと一緒に、園生活に慣れることで精一杯でした。全てが初めての経験で期待もありましたが、不安な気持ちの方が大きかったです。しかし、三ヶ月経った今、園生活にもだいぶ慣れ、元気に登園してくる子どもたちの笑顔を見ることが毎日の楽しみとなつています。そして、素敵な先生方と一緒に仕事ができることに幸せを感じています。

私はまだまだ知識も経験も浅いのですが、子どもたちや保護者にとつては、一人の幼稚園教諭として見られています。子どもたちの生きる力の基礎を培うという責任をしっかりと自覚し、子どもたちや保護者から信頼される幼稚園教諭になれるよう、日々努力を重ねていきたいと思っています。

今の私が教師としてできることは、少しでも自己の指導力を高めていくことだと思えます。そのため日々研修に励むと同時に、周りの先生方や子どもたち、保護者の方から、多くのことを学びたいと思えます。そして、子どもたちと喜びや楽しさ、また悔しさや葛藤、悩みを共有し、共に成長していきたいと思えます。努力を惜しまず、一生懸命頑張りたいと思います。

経験し、いろいろなことを感じ、成長できるのが来年以降の教員生活に大きく関わることや、念頭において、これからの一年を充実したものになりたいと考えています。これからもうまくいかないことや困難なことなどが出てくると思いますが、自分の成長のためのチャンスととらえて、真摯に向き合っていきたいと思っています。

これから教員人生、楽しいことだけでなく辛いこともたくさんあると思いますが、辛いことから目を背けるのではなく、しっかりと受け止めていきます。また、一人ではなく、周りの先生方と協力して取り組んでいくことで、「教諭」としての職務を全うしていきたいと思っています。



縦横社会教育課 社会教育担当より

「地域家庭教育推進県中
ブロックセミナー」の開催
～ワールドカフェ～

昨年度のセミナーは、コーヒーやハーブティーを飲みながら自由な雰囲気でお話し合う「ワールドカフェ」という新しい取組で開催しました。

高校生から八十代までの様々な世代の方々が、家庭における子どもをほぐくむ環境づくりや地域の教育力の向上にせまるために「考えよう！地域の力・家庭の力・学校の力」をテーマに、活発に意見交換することができました。参加された約百二十名の方々からは「いろいろな考え方にふれることができ、大変有意義だった。」「話を聞き自分も何か取り組みたい。」などの感想が寄せられ、大変満足されていたようです。

今年度も十月六日(日)に郡山市労働福祉会館においてワールドカフェ方式でセミナーを開催いたします。昨年同様、各学校やPTAの御支援・御協力をいただければと思います。後日、市町村教育委員会を通してお知らせさせていただきます。



<耳を傾け、意見を述べ合う参加者>



「平成二十五年度子ども
読書活動推進研修講座」

本事業は、県内各地で子どもの読書活動を推進するボランティアの資質向上を図るとともに、学校図書館の支援もできる人材を育成することを目的としています。

県中地区では九月十九日・二十日、同二十八日の三日間、郡山市労働福祉会館で開催します。この講座では、出版文化産業振興財団(JPIC)読書アドバイザーの児玉ひろ美さんを講師としてお迎えし、読み聞かせの技術、子どもと本を結ぶための演習等を行います。また、県立・公立図書館職員による講義やボランティア団体の実践発表の他、三日目には交流会を行い、ネットワークを広げていきたいと考えております。

講座を終えて受講証書を受け取られた皆様は、各市町村教育委員会を通して、各学校に名簿が配付されます。

各学校、図書館におかれましては、読み聞かせや学校図書館の環境整備、図書の修理等、読書活動推進のために活躍の場を設けてくださいますようお願いいたします。

学校教育課管理担当より

「学校運営の効率化」と
「不祥事防止に向けて」

安定した学校経営を展開し、更に仕事の効率化を図っていくには、その大前提として、自校から不祥事を出さないことが不可欠です。

県教育委員会では、平成二十二年三月に「信頼される学校づくりを職場の力で」を発行し、その中で、不祥事防止にあたっては、「教職員が相互に無関心な態度をとらないようにし、学校における人間関係、特に、教職員同士のコミュニケーションを密にし、職場のセーフティネットとしての機能を高めること」の重要性を訴えています。更に、「チェックシート」には、「風通しのよい、空気がよどまない、働きやすい、働きがいのある職場環境づくりや人間関係づくりの推進」が提案されています。また、今年三月には、「学校運営の効率化のための取組事例集」を配付させていただきました。

「学校運営の効率化」と「不祥事防止に向けた取組」の両者に共通するキーワードは、「同僚性」を高めていくことです。そのためには、職場内外での『コミュニケーション』を大切にしていることが、各学校に求められています。

学校教育課指導担当(特別支援)より

チームで支える特別支援教育
～特別支援教育の
充実を目指して～

県中地区の特別支援教育の推進につきましては、各幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校で進められているところとです。

巡回相談等で各学校を訪問させていただく度に、特別支援教育コーディネーターを中心として、目の前の子どもの困り感に寄り添い、その支援策を校内委員会やケース会議等を開催しながら組織的に取り組んでいる学校が増えてきていることを感じ、素晴らしいことだと考えております。

さて、平成二十四年七月二十三日に文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会特別支援教育の在り方に関する特別委員会では、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」で、①共生社会の形成に向けて、②就学相談・就学先決定の在り方、③合理的配慮及びその基礎となる環境整備、④多様な学びの場の整備と学校間連携等の推進、⑤特別支援教育を充実させるための教員の専門性の向上等五項目にわたって報告されています。この目指す

ところは障がいのあるなしにかかわらず、地域で共に学び、共に生きる教育です。この考えは平成二十一年九月十八日に福島県学校教育審議会から出された「今後の特別支援教育の在り方について」『地域で共に学び、共に生きる教育』を目指して」で既に述べられているところで

先日、養護教育センターで実施された小・中学校特別支援教育コーディネーター研修会では、コーディネーターの先生方がインシアチブをとって校内体制や校内委員会を整備運営している発表がありました。今後、こういった取組が小・中学校や高等学校に広がれば、「地域で共に学び、共に生きる教育」が具現できるのではないかと考えます。こうした取組を促進できるように、特別支援教育課、養護教育センター、特別支援学校との連携を一層図りながら、チーム力で支えていきたいと考えます。今後とも、よろしくお願ひします。

